●本誌は日本に於ける婦人運動の先驅也

世界婦人

石川兄を送る

福田英子

顧れば十五年の春秋、夢かとばかり疑はる、君が十八の春、亡き夫の許に寄寓すべく訪はれし時、吾は初めて君を知りぬ、性來人に馴れ易き吾は温良篤實の君を得て家庭の一員とし、親しく交りぬ、其時吾が夫は語りにき、こは十四の年より吾が許に愛育せる義弟なりと、當時吾が夫は、父母と意見の衝突わり別家せられし時とて、米鹽の事に窮し、困厄を極めし時なれば、此家庭に入り給へる君も、言語に盡せぬ極貧を共に背負ひぬ、米の一升買ひ、薪の一把買ひ、借錢の使ひより、質屋の通いに至るまで、若かりし君の仕事となりぬ、今も此事の話頭に登るや、何時も其昔を偲びては互の袖を濕ほすぞ、をかしき、

斯かる貧苦の中に在りて、三度の食にも事を缺ぎながら、尚は時事を談じ研學に勤めて、和氣靄々の内に骨肉よりも親しく月日を送りぬ、所謂『武士は食はねど高揚枝』を理想しつ、國士の一家を以て任じたる其頃の我家ぞ趣味深かりき、君も亦これを忘れ給はざるべし、吾は思ふ、君の如き温良篤實の君子を以てして、困苦波瀾多き、社會生活に自ら投ずるに至れるもの、蓋し吾等過激なる不平家の家庭こそ大なる原因たれと。

吾々夫婦は實に破壞者たりき、野心家たりき、此忌むべき現社會と舊式家庭とを呪へりき、居は器を移すとかや、君が今日の奇禍を蒙れるもの、實に吾等の導きに非ざりしか、吾は老さき短かき君が母君の御歎きを聞くにつけても、身を截らるゝの思ひに堪へず、君も記憶せられん、君が學業成りて身を官途に立てんとして失敗せるを聞き、吾は君の希望を打破して、所謂『無冠の帝王』たる新聞記者たらん事を奬めて止まざりしを而して君を堺利彦氏に紹介して、朝報社に推薦されんことを依頼せしを、爾來幾星霜、君は益々研學の功を積み、識見彌々高く吾は常に敎を請ふ事となりぬ、吾が夫亡き後は、一家の事も大抵君に謀りて處決するに至りぬ、かくて往時の姉弟は今日の兄妹となり、吾は杖とも柱とも唯だ兄をぞ頼む。

吾は感謝す吾は君の助けによりて些なからず向上したるを覺ゆ、吾は放縦亂雜の生活より讀書の人となれり、舊時の墮落の境涯より微かながらも清き御光を望み得るの身となれり、功名榮達にのみ憬がれし身は、半解通にも、社會主義てふ事に心を傾くるに至りぬ、而して是れ皆な君の賜物なり、君と吾との交や到底片言隻語の能く盡す所に非ず、しかも、君は今ま政府の忌諱に觸れて冷たき、囹圄の人たらんとす、別離の悲哀何ぞ堪へん、吾が胸は躍り、吾が心は亂るされ君が單騎難を負ふて道のために鼎鑊をも辭せざるの雄姿よ、吾は坐ろに欽慕の情に堪へず、ア、君行き玉へ、勇ましく行き給へ、吾は、小さき一身を捧げて吾が使命に赴かん。唯だ力盡き氣挫けて後殪れんのみ、ア、君心安くして行き給へ吾も十九年前の牢獄を夢みて懐かしき、獄中の君を偲ばん。

敢て問ふ

奥田聴雨

△男子だつて何も威張る譯のものじやありますまい、同じ人間だもの。だから男女同權とか、女尊男卑とか云ふ議論も起るんですわ、と云つてみた所で「貴婦僕は今日何を致しませう」と夫に出られては大概愛想がつきてしまう。わが姉妹以て如何となす、敢て問ふ。

△僕は今少し吾國の婦人に威嚴あらまほしく思ふ、ことに自分が妻を迎へたならば、此威嚴てふことを婦德の一として尊重せうと思ふ。しかし何もかも妻のいひ儘、氣儘に服從して、御機嫌うかゞひばかりは出來ない「貴郎お菜を早く買つておいでなさい御飯が冷くなるじやありませんか」とせき立てられては、すこしむかつく方だ。兄弟以て如何となす、敢て問ふ。

△世人口を開けばまづいふ。自由戀愛、自由結婚とその言や善し、その辭や美し、されど學業いまだ牢にして口自ら糊する能はず、徒手遊食の徒が、妙齡處女をはづかしめて、煩悶し、技藝未だ修まらずして邪淫の巣をやどし、悔ゆるも及ばず、氣息奄々、自ら傷み、胎兒を苦しめつゝ、ある婦人を見る每に、この自由戀愛、自由結婚てふ言辭の濫用によりて弄ばれたる犧牲の多きを痛憤せずんばあらず。あゝこれ男子の毒手に抱かれし女か、寡婦の甘言に陷りし男子か、敢て問ふ

△基督の信者必ずしも善人ならず。惡人必ずしも不信者に限らず。敎會の醜聞あつて疑なき能はず。敢て問ふ。

△懺悔また懺悔その聲高きを聞く、人類の慶事なり。されど懺悔は決して人世行路の絕對善なる道にあらず。懺悔すれば過去の惡事惡行はすべて消滅するてふ人道は存せざるなり。もしこれありとすれば是れ世道人心の根底に一大動亂を釀すべき、一大事ならずや、敢て問ふ。

谷中村に田中翁をみて

牧民生

數百年の歷史ある
關東唯一の肥沃の地
一千餘人の農民が
腹鼓打ちし谷中村、
黄金てふ魔に魅られて
公道知らぬ縣司等は
私慾の狗と成り果てつ、
名を公益と救濟に
藉りて欺く公民の目を
法律てふ網に掩ひ縛り
種々の形式を操縦りて
民の寶貨を奪去り、
一村全家散り〳〵に
生命をすらも保證なく
罪人の如追放たれし
無辜薄命の蒼生は
疲れ休むる伏屋なく
苦しみ告げむ人もなく
獨り涙に憤れども
憐み救ふ神もなし、
噫、譽ある聖代に
この民衆援ふ法律なし。
當時ひとり奮ひ起ち
無辜を憫み救はんと
白銀の髯逆てゝ
世を覺醒むる聖者あり、
血は愛民の情に湧き
肉は救助の道に鳴る、
赤誠心は十年も
只一日の如くにて
力を盡す義人こそ
我が慕はしき田中翁

寫眞の說明

平民新聞紙上「父母を蹴れ」の論文の爲め石川旭山、山口孤劍の兩君は其筋の忌諱に觸れ去月廿五日東京監獄に入監せられたり、此の寫眞は廿五日朝日比谷公園にて同志相集まり後の紀念にもとて撮影せしものなり
正面より第二列右より四人目の鳥打帽にフロックコートを着せるは、石川旭山氏にして氏と並び立てるは山口孤劍氏なり兩氏の左右に立てる右なるは幸德秋水氏にして、左りが堺枯川氏なり

●本誌を讀まざるものは眞の婦人に非ず

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

如是我観

淺川松南

古の人謂へて曰く、人若し世を救はんとする代りに自家の救濟を見出さんとつとめ、人類を解脱せしめんとする代りに自家の解脱をつとめなば、其の世界人類救濟の爲めに盡す事如何ばかりぞと。人よ徒らに口と筆とに依りて人類救濟の事に從はんとすること勿れ。世を救はんと欲する者は先づ自らを救はざるべからず。自己一身をすら救ふ能はざる者の何ぞよく人を救ふの權威あらんや。

○噫、當今の病弊は人々自ら解脱せずして世を解脱せしめんとする事にあり。夫れ一人眞人の心底に立ち身を以て世を率ひんとする者と千人口と筆とにより世を救はんとする者と比して、世間は果して何れよりか眞の救を得べき。抑も世間の改革とは何ぞ、人々自ら改革せずして何處にか改革ある。

○山高くして水清らかなる我等が住する斯の帝國何ぞ仁義道德の聲高くして其の實の擧らざる。人生改革の呼びのみ大にして何ぞ其の實の伴はざる。今の所謂學者宗教家願はくは口耳を以て人を導き世を率ひ得るものと思惟する念を去れ。人は唯々人を以て導き得るものにして言論學覺人物のみ。

○明治四十年の春は何ぞ日本の精神界に斯くも多忙なる。萬國基督教青年大會參列の爲めに海を渡りて日本に來る仁人君子幾千百人。而して更に特筆すべきは救世軍總督ブース大將の來朝なり。然れども此等我に於て何の關する處ぞ。今や信仰は外にあらずして內にあり。人々遂に自ら悟らざる可らず。外にあるものは形式のみ、職業のみ、世間の所謂宗教と云ふもの是也。

○自覺せよ日本國民。日露戰爭の汝に教へしものは何ぞ。摸倣の文明は汝の衷心に永く不安の念を抱かしめて盡く者にあらず。維新以來四十年努めて泰西の文明と摸倣を吸收せんと汲々たりし日本國民は今や日露戰爭によりて摸倣の絶頂に達したる事を知れり。他力によりて來りし日本國民は今や自力によりて自家の進路を發展すべく衷心に或物を求めざる可らず。日本國民に流るゝ煩悶とは衷心に或物を求めんとのさゝやきの響なり。日本國民の總てを通じて今や自覺の氣は滿ち渡れり。勞働者は勞働者自身の地位如何を、婦人は婦人の權利如何を、やがて此の自覺の叫は人生改革の源となるべし。耳そばだて、聞け、日本國民。今や西比利亞の野原より吹き來る風も太平洋の浪のさゝやきも皆日本國民に自覺を促すの聲ならざるはなし。

友に送る

女學生

A樣おつしやる通りこの世は暗黑です。罪に滿ち、汚れに滿ちて居ます。けれども私共には、天然といふ美はしい慰安の女神があるではありませぬか、潔く汚れざる誠の愛、一點も私慾の塵を止めずして、世の罪惡を救ふ爲に、其身を犧牲にさゝげ給うた導きイエスクリストの純愛は崇高なる美光を放つて、高くみ空に希望の星と輝いて居るではありませぬか。お歎きなさいますなA樣、神は決して人を苦しめる爲に此の世にお下しなさつたのではありませぬ。幸福ならしめんが爲です。神聖の幸福を心に悟つて、世の罪に勝ち、惡を打ち、神の心に自己をきたへて、尊き天職をつくさむが爲に希望の光を高く認めて潔き愛の楯に惡魔の征矢をふせぎつゝ、正義の道に熱誠の事をちかつて進んだなら、何の世の中に恐しい者がございませう。平和よ、自由よ、平等よ、皆愛の賜ではありませんか。愛の聖火のもゆる處、苦痛もわづらひも何程の事がありませう。

A樣もう泣くをお止めなさい、今泣いて居る時ではありません。私共は今徒らにこの消き涙を流して居る時ではありません。いかに泣いても、もがいても、滿身の熱血を涙とかへても、冷たきこの世は、猶飽き足らないのでございます。A樣もうお泣きなさいますな。幸に心も肉も健かに生い立ち給いしA樣、其力ある、偉大なる心の眼を開いて此人生をご覽なさい、時勢の潮流に棹して來る革命の鋭き焔を御覽なさい

うれしき
A樣にまゐる　　　Bより

海內時事

○舞蹈問題

さる舞蹈好きの小學教員が渡韓の送別會を名として、郡下の男女教員若干名か、舞蹈會を催し、女學生、淸國留學生等之に打交りて、亂舞いたし候事、近時教育界の大問題となり、それ〴〵秘密の調査を經候後、先づ之に關係せし三輪田女學校生徒は直ちに退校を命ぜられ、男女教員等は府知事より懲戒處分を受け候由。下級教育者の浮薄なる虛榮心と、上に立つ教育行政者の頑固なる舊道德とは、はしなくも茲に衝突を來し候事、なか〳〵に興味ある事と存候。吾等は彼等の何れにも興ずる者にあらず。吾等は、貴族的なる、虛飾的なる舞蹈に心醉する、教員や學生を憐れむと共に、全く男女交際の道を杜絶せんとする彼等行政者の頑迷を怒るものに候。教員、學生諸氏よ、願はくは浮きたる心を引きしめて、眞面目なる本心にたち歸れ。神經過敏なる當局者よ。願はくは血迷ひし眼を据ゑて、眞個男女交際の道を開け、さらば兩者の煩悶は易々として茲に解決せらるべく候。

○ブース氏來る

救世軍の總大將ブース氏は來られ候。日に日本救世軍の大々的廣告の下に、多くの日本國民の歡迎の中に、ブース氏は來られ候。されど吾等の熱誠もて期待せしブース氏は果して何處に來られ候や。市中の至る處、一二丈の大看板に生けるが如き肖像のブース氏は吾等の眼前にかゝれり。されど吾等は何處に眞のブース氏を見る事を得候や、ブースてふ虛名は日進が所謂「僅かの小島の主」に感泣せり、紳士閥の花やかなる歡迎にわらん限りの御世辭を振り撒けり。東京座に毎夜好奇心に滿てる數千の公衆を集め、數百の改悔者を得てはいえめり。されど吾等は一度も鮫が橋に氏の影を認むるを得ず、飢に泣ける多くの平民は彼等の最も大なる同情者に接するを得ず候ひき。あゝ怪しうも吾等は氏に於て遂にポーロの面影を窺ふ事能はず、胸中に漲るいふべからざる不快の念を抑ふること能はず候。殊に日本救世軍が、或は新聞記者を饗應し、或は貴顯紳士に諛辭を呈せし、陋劣なる態度は何事に候ぞ。正直に申せば世界の基督教運動中、救世軍は其熱烈なる點に於て吾等の最も信賴せし處に候ひき。あゝされど吾等の失望は當然なり。ブース氏は世の救ひ人にあらずして、單に一個の大事業家に過ぎざれば也。

○平民新聞の廢刊

吾等の最も親密なりし日刊平民新聞は終に倒れ候。外政府の頻繁なる迫害と、內財政の困難なるが爲め、去月十四日を以て敢なき最後を遂げ候。來るや電光、去るや石火、此世の生命僅々三ヶ月に過ぎざりしも、彼が使命は實に遺憾なく致し盡され候なり。吾等決して涙なきにあらず、されば、起るべくして起り、倒るべくして倒れ候、彼の男らしき生涯を考ふれば、敢て未來の理想に慰藉を得るを要せず、たゞ〳〵時々刻々に於ける現實の奮鬪のあだならずして而も一大事實たるを思ふて自ら拌舞激勵の勇氣を增し候。嗚呼戰はん、戰はん、たゞ今に戰はん。これはたゞ吾等が知らざる道の使命に候。

○石川・山口兩兄の入獄

平民新聞紙上「父母を蹴れ」の論文は圖らずも其筋の忌憚に觸れ、筆者山口孤劍兄と發行兼編輯人石川旭山兄とは秩序壞亂の罪に問はれ、前者は三ヶ月、後者は六ヶ月の輕禁錮に處せられ、去月廿五日東京監獄に入獄せられ候。兩兄を送るに當り・たゞ淋しき微笑あるのみ。希くは永月の獄裏恙もなう一日も早く吾等をして兩兄の笑聲を聞かしめよ。

○短文、短歌及新體詩を募集します

▲短文　清新の趣味ある短文を募ります。嬉しき事、悲しき事、腹の立つ事、何でも郵便端書に明瞭に記して投稿して下さい。

▲短歌　新派、別に何等の制限をも設けません、しかし、あまり貴族的臭味のあるものは取りません。

▲新體詩　調の如何を問ひません。但しあまり長いのは厭です。艶なの、優しいの、凜としたの、雄々しいの殊に革新の氣を帶びたのを歡迎します。

毎號の原稿締切は、五日と二十日です、用紙は何でもよろしい、端書は殊に輕便でよからうと思ひます。婦人諸姉の振つて御投稿あらんことを切望いたします。

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

おこがましくも玉郎兄に

神川生

玉郎兄とは誰人なるか、吾人そを知らざれども、世界婦人第八號の紙上に於ける、兄が御高説により卿が御意向のほどは伺ひ申候。もとより若年の此身、貴説に對し、われやこれやと駄言を弄するには無御座候得共、少々我が腑に落ちぬ所も御座候得ば、赤裸々の所一筆こゝに認め申候。若し御清眼を汚がすの榮を得ば我が幸不過是候。

御高説の通り、女子をして現在の如く優柔不斷、虚飾惑術、奴隷無能に淡たらしめしは、云ふまでもなくいつの頃か、經濟的獨立を奪はれしがためにて、現時高等飼犬の如き吾人婦女子も、向後幸にして獨立自活の自由を得なば、眞個女子としての社會的地位も自ら獲得し能ふものと愚考いたし居候。茲に吾人は極力婦人解放を叫ぶとともに、先づ暴慾なる社會に對し、何よりも第一に、殘忍の妄想「女性屈從主義」を打破せざるべからずと存じ候。女子は到底男子に對比し能ふ者にあらず、而かも女子として最美の德は、所謂柔順にして男子に屈從するにありと(此論は去る二十三日讀賣新聞、教育家月旦參照)云ふが如き、かゝる妄想を抱ける幾多の婦女子を叱咤覺醒するとともに、又識つて女子をして己が飼犬の如く蔑視し、暴戻と權勢の下に、己が思ひのまゝに驅使せんとする惡德非道なる男子に對し、吾人は充二分に敵對の鋒を取らざるべからず候。而かもこの種の男子が世間數多きに至りては思ふだに寒心の外無御座候。此點に於て強いて男子その人を責むるにはあらねども、幾多の男子が、女子を凌辱して而かも尚は飽かざる彼等の汚劣なる所行に至つては、宜しく男のあらむ限り、匕首なり毒刄なり斷魔劍なりを揮つて、極力陣頭に奮戰すべしと存じ候。いづれ我が國婦人解放に對しても早晩一大活歴史は書かるゝならむと愚考いたし居候。思ふに去日海内の時事欄の一文に顯はれし記者の思考も、多分那邊にありて、決して一も二も女子を惜し擯斥するが如き愚を學ぶ者には無御座候。此意宜しく御含みいはどを願ひ上候。草々頓首

對月漫錄

宮代對月

○明月、鏡の樣な明月、是は實に幾多の人々をして泣かせたり笑はせたり又は歌はせ舞はせたものである、千古の昔から月は即ち一の月であるけれども夏の月は人をして悦ばせたり歌はせたり舞はせたりするが、秋の月は何となく人を愁へさせ泣かすものである、彼の西行法師も大江の千里伯父さんは申すに及ばず幾多の歌人は皆秋の月に泣いた、而も人を自然に歸らせ又眞面目にする、僕は俗世の濁れるのを見ては此明月を抱いて山深く入らふと思ふ事屢々である何故に人は此樣に清く自分の心は照らす事が出來ぬのであらふ、幾千年の昔から幾萬年の末までも月は變らず清く澄み輝いであらふが人は何時までも汚れと濁りとは洗ふ事が出來ぬだらふか」と云ふて僕は決して屈原を氣取る譯ではないよ。

○戀愛文學、僕は戀愛と云ふ事は人の天性であると思ふから決して戀愛文學を攻擊はしない、寧ろ充分研究すべき筈であると思ふ、人間は到底孤立すべきものでない、必ず何物かを愛せずに居られぬ。自分が他から愛せられん事を望む樣に、是が社交的なる人間の眞性である、見玉へ子のない婦人はキット猫や犬や人形さへ愛して居る(否男子でさへも)ではないか、即ち戀愛は人間天與の固有性であるのだから又戀愛に關係した文學も充分發達せしめて之を善用する事を學ばねばならぬ、然し僕は近時流行の輕薄なる猥文學を好むものではない、願くば眞心情に滿ちた戀愛を歌いたいね。

○結婚をすると云ふ事は人間に取つて最も大切なるものである、然るに古來日本の習慣として誰も何とも思つて居らぬ近年殊に烈しい、犬猫でさへ顏や種類から調べるではないか、況んや人間をやである、人生苦樂の別るゝ大事件である輕しくすべきであらふか、故なく婚し又故なく離れるのは罪惡である」。夫妻は主從ではないと云ふて女權を云々するのではない、如何な場合でも離緣の證を告るは禍の因である、男子の談判際中に婦人の口を差出すは隨分見つとも宜いものではない、僕はそう思ふ、新婚者が願くば只に夫婦となると思はず何處迄も夫婦であると同時に朋友である同努者である己れの半身であると思はん事である、と云つて僕自身未だ其經驗を有たぬから大言は吐けないが。斯くすれば其處に敬意あり愛情あり互に遠慮あつて幾分我儘の出る事を防いで睦じく生活が出來ると思ふ一體日本の習慣として夫婦は主從の如く夫は無上權を有ち婦は只是れ從ふの資がある、僕は殊に田舍に行つて此觀を實にする、只夫は前にして妻は後にすると云ふ樣な區別丈けは立てた方が家庭の治まりは宜い、然し是は役目であつて價値ではない、切に僕は新婚者に此事を望む、是は獨身者たる僕の管見である。

文豪カーラエルと婦人自由問題

婦人の自由問題に對してカーラエルは最も趣味ある書翰を、新聞紙上等に發表するを許さずとの斷りがきの下に、アーノルド、ブルークス氏に送られたり。然れども兩者は最早彼世の人となり居れば此處に發表せられたるものなり。

「譯者いと面白からぬことには候へ共、現時輿論の焦點ともなれる婦人自由問題に關し、少しく愚見を申上ぐべく候、就いてはほんの私見に候へば何卒秘密になし下され度、新聞雜誌等へ御發表の程は堅く御無用になし下され度願上候。

實に過去廿五年間、殊にこの三四年間最も喧しきこの問題は、人類社會に流行するいとも不幸なる亂世の徵とも見るべきものにして、眞に小生の危殆に堪えざる所にて、該問題に付いて考ふるも嘔吐をもよほし、餘程強ゐらるゝにあらざれば、これを避けつゝこれ有り候ひしが、何となく心安からず候へば、今いさゝか心に浮びし點を貴殿に申上げんと存じ候先づ第一に、此世に於ける婦人の役目に付いて考ふるに、何人も婦人は眞性にして、氣高く、今も昔も人の母たり且男子の配偶者たることには一言の異議なきと存候。故に小供等の母として一家の主婦として人類に落下し來りし最高尚なる將切要なる婦人の務に對して、吾人も又强けれども弱き此世の女王等に温健にして神聖なる方法に於て自由を許し、尚進んで選擧權をも承認することには少しも異議無之候。是等には吾人一言の異議なく候へ共、婦人の眞の運命は婦人が敬愛する男子と結婚し、生涯を愛情に全心をつくし、男子の保護の下に默つて導かるゝことかと存じ候。更に婦人が此の運命を誤るか若くは拒絕せば此世に於て婦人のために開かれたる正直なる職業に於て何たるを問はず全然之に從事する權利を有することは否む可らざることかと思はれ候。蓋し男子が從事する職業以外婦人が多少適當かと思はるゝ職業も多數有之、即裁縫機械印刷術書記役等に御座候。例へば本來藥の効驗あることに付き、醫業未大に開けずして現時よりも一層健全にて切實なる時代に於て、投藥は世界が有しする有力なる醫者たり外科醫たり將又看病婦たりしことは事實證明せられ候。彼等の智力、同情及不思議に怜悧なる觀察力等は病氣を取扱ふに特種の性質を有するものに御座候、是を婦人の側より見れば、これ又女性特有の有用なる性情を有することも確實に御座候。

されば深慮ある婦人にして男子より獨立せんと決心すれば、如何なる職業に從事すればよろしきかとは先決問題にて、小生は敢て醫學を修むることをすゝめ申候。醫業は何かにつけて都合よろしく且割合に容易にしてナカ〳〵利益あり、役立つものにして小生の大に彼等に奬勵せんとする所のものに御座候。然れども小生の欲を申上げんに、出來得ることならば、醫學を學ばずに女教師か又は適當なる配偶者を擇ばんことを希望仕り候。現時解剖學界や臨床講義や又は一般の醫學研究及音樂會等に於ける青年の間に青年婦女等が純潔と謙遜とを考へて心を惱ましつゝあるとも明かなる事實に候へ共、小生の大に取らざる所に御座候、以上は小生の申上げんとせしすべてのことに候、御公開の程は何卒御無用になし下され度候。頓首、

一千八百七十一年二月九日

トーマス、カーラエル、

アーノルド、ブルーク殿

次號豫告

志士末期(小說)續　二葉亭主人
題未定　安部磯雄
題未定　堺利彥
灯影幻影(續)　白柳秀湖
題未定　木下尙江
ヘンペックド、ハスバンド(續)　原霞外
有夫の婦人に質す　福田英子

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

情死

石川生

人の世は暗黒なり、人の心は醜汚を極む、吾が二人の友は、此の濁りたる人の世を棄て、去りぬ、此の穢れたる人の子を棄て、去りぬ、相抱きて去りぬ、共に妙齢の麗はしき身を抱きて去りぬ、有為なる多望なる春秋を棄て、去りぬ、嗚呼美しかりし氣高かりし二人の友は清き愛の生命を懐いて世を去りぬ。星光燦然たるみ空の國に。

吾は惜みぬ、されど吾は悲まじ、去りにし友よ、清く結ばれし二人の友よ、永遠の生命に結び、無限の愛に結ばれし、倖き友よ、御身等は此世に於て此上なき命にておはしき、不幸の生涯を送り給ひき、されども御身等は、真聖なる戀愛に於て遂に汚れたる世に勝ち給へる也、清く、美はしく、永久に勝ち給へる也、み空に輝く星の如く！ あゝ吾れ何をか悲まんや。

兄の君よ、御身は幼かりし時より貧しき家に成長し給ひぬ、御身の父君は破れたる人の世に、拙なる人の子と相伍して世渡りすべく餘りに品性高潔に在し給へりき、されば有り餘りし家財も所謂文明の進歩と共に何時しか殘り無く人の手に渡されたり、されど性來賢しき御身の、學びの道の始めより多くの同輩に勝り給ひ、小學、中學を神童として過ぎ、秀才として卒へ、專門の學、將に成らんとするや、世は君の天才を待ちつゝありき、あゝ天才の君よ、吹く風荒き嵐に咲ける櫻花なる君よ、御身は其全心を捧げて君が愛人と結びぬ、濁流滔々たる今の世に投ずべく御身は餘りに清かりき、一點の塵をも厭ひ、半點の瑕瑾をも惡みし御身は、常に空の星を仰いで嘆じ給へりき。

友よ、姉の君よ、稚なかりし時より金枝玉葉と愛育せられし姉の君よ、御身が兄の君と相愛するに至るや、花之に祝し、月之を祝し、萬の物は才子佳人の合卺を絲竹絃歌して祝し歌ひぬ、されど御身は一家一族の強迫によりて既に人に嫁ぎぬ、いまだ初春の頃なりき、松風寒き東海の濱邊に、御身が真との愛人と唯だ二人、熱き腕に抱きあひて、儚ならぬ世を悲しみ給へる由、御身が水莖のあと美しく便りし給へるを讀みけるぞ、あゝ荊棘深き荒野に咲ける白百合なる君よ、父君を初め御身の一家一族は言ふ迄も無く、世を挙げて、御身の美はしき真の愛を、神の許し給へる清き愛を、無下にも罪悪として責め詰めぬ。

人の世は餘りに濁りたり、人の心は餘りに腐れたり、純潔を行よりも愛はしき此世の旅を、御身等自ら旅するに忍びざらんや。清き星は唯だ高きみ空にのみぞ輝ける。吾は餘りに思慮淺かりき、殊に兄の君を呪ける事の恐なりしよ、吾は曰へり、「御身の才と學と信仰とを以てせば、今、日本に起りつゝある社會的運命を指導し激勵するは最も易し、社會の運命は恐りて御身の双肩にあり、御身の使命は大なり、御身の責任は甚だ重し、清き御身の戀愛は素より高けれど、されど御身が世に負へる責任には易へ難からん、且つや御身の戀愛は餘りに空想的なり、此の世に於て實現せんは大なる難なり、御身の愛する人は既に他に嫁げる御身に非ずや、素より彼女が何は全き處女御身に捧げつゝあるを知る、されど彼女は舊き道徳、舊き慣習の鐵鎖に縛られて苦悶懊悩しつゝあり、君よ彼女を棄て、革命に行け、是れ彼女を安に救ふ所以なり」——あゝ吾は今之を記するだに冷汗背に滴るを覺ゆ。

あさましかりし吾が言よ、高き友は一たびは身を東西に分ちたり、されど心は永久に離れざりき、永久の光明に清く照されぬ、二人の友が最後の便りに言ひ越し給へるこそ聖なる香にも薫ずる天使の聲なりき、「君は吾等を悲しみ給へり、吾等を憐み給へり、されど吾等は悲しき涙の雫に清き光明の宿せるを見ぬ、永久の光明は今は吾等が上にあり、無限に幸福は今や吾等の間にあり、君は吾等に社會の革命を勧め給へり、此の大事を營むべく吾等は餘りに力弱し、されど之を以て寧ろ吾等の誇りとせん、見よ、吾等が希望は無限にあり、黄金の花開き、馥郁たる微風薫ずる平和の園に、吾等は盡きせぬ幸を謳へ歌はん、『夢の間の此の世』、其の革命に指一本を汚すも物憂しや、君よ吾等の傲慢を宥せ、靈と靈との結ばれし吾等、朝露の如き一塊の肉體も今は有りて用無し、君よ吾等のセルフイッシを責め給ふな、人は皆な此の聖なる幸福に生くべく絶對に自由なり、絶對に平等なり、世の改革も寸毫の用無し、人の救濟も些少の効無し、吾等は唯だ純潔に、熱烈に、永遠に、愛の花咲く天國の門に急がんのみ、世の改革も、人の救濟も、畢竟するに偽善の叫びなり、天國の門は常に開かれぬ、君よ、疾く來れよ、吾等は先づ行かん」

かくて倖き二人の友は、爛熳たる落花の中に、相擁して死に給へり、永久の生命に逝き給へり、天國の門に急ぎ給へり、あゝ倖き彼等の前には何ものゝ權威も無かりき、富貴何する者ぞ、法律何する者ぞ、閥何する者ぞ、家何する者ぞ、親族何する者ぞ、道徳習慣何する者ぞ、聖なる愛！是れ何者よりも尊き權威なりとは彼等の確き信仰なりき、萬人こゝに於てのみ平等なり、自由なり、幸福なりとは是れ彼等の實驗なりき、彼等は絶對に「人世」を彈劾せり、「人世」を拒絶せり、「此世の革命！」の如きは彼等の眼には恰も兒戯に類せりき、あゝ荊棘の中に花開きし白百合は、天地の表情より來れる愛の頬笑なりき、嵐吹く嶺に咲きし櫻花は、汚れし人の世に映ずる天使の真姿なりき。

あゝ倖き二人の友は去れり、人の世は益々暗黒なり、人の心は益々醜汚を極む、世界は百鬼夜行の街となりぬ、唯だ燦然たる二點の星、み空に高くぞ輝きぬる。

獄窓の夢

神川松子

嗚呼東海の島
恨みは多き日の本の
大和島根はさりながら
涙はもろき人の子の
胸の思ひをいかにせむ。

民人のためにと司人の
治安を語る法律あれど
賄賂を奇才と汚顔に
不正をよめる今し世の
直路はいづし滅亡なれ。

人は彌生の花の蔭
還り香袖にほゝと笑み
仰いで大杯滿々と
酔夢の枕いと高く
いこふもはかな束の間ぞ。

世紀移りて二十一
世は革命の旭日影
歡せし潮は今叫び
漲たゝる血汐我が魂と
歌ふは雄けき猛士の聲。

身は幽囚のあだし人
小暗き獄に夜々の夢
法律の不道を罵れど
饑えに抜かれし我が胸は
聲はかすかに消え渡る。

呼々消えわたるわが聲は。
行衛いづくぞ魂遠み
せめては蒼空に冴え渡る
月の影にやことよせむ
光さやけき汝が胸に。

夜半の獄に夢さめて
かすかにもらす枕邊の
一朶の微笑白梅と
幾多つらきゆ嵐にたへ
やがてほゝゑむ春の野に。

いづれはもれぬ人の子の
汚れ果てにし顯世に
何をかまたも求むらむ
たゞ革命の烽火こそ
天神の與へしわが天務。

いざや進まむ人類のため
世のため救世の旅かざし
染めし血汐に身を捨てゝ
擬る劍に革命の
最期を語る猛士の影。

編輯室より

毎度編輯が遅れまして、誠に愛讀者諸君に申譯が御座いません、餘り數々遅れますので或人は期日を變更しては、どうだとの御注意も御座いますが、臨時の用事で、おくるゝならばそれも宜しいでしやうが、つまり、人手が足らぬより起こる罪で御座いまして、その人手の足らぬのは何かの無い相談で御座いますので、獨り仲々苦悶致して居ります、併し燈の火のパッと燃へて消ゆるより、かすかな火ながら永く一縷の光明となつて、生存して居つたらばと孜々として居りますから、どうぞ今暫し御寛容の上御愛讀下さいまし、

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

志士の末期（承前）

二葉亭主人

「や、去かし、今日は随分空想に耽つたわい。神經に締りが無なつたものと見える」と思ひつゝ、外つと夜着を掛直す時、ペイロパーロフスク寺の大時計が時を打つて、仕掛で自然と讃美歌の譜を調べ出す之を聴くと、いつも何とも言へす心持が好くなる。既中夜死して深夜の寂寞を破つて其音の瀏喨と響き渡るのを聞く時は、俗念は頓に消えて心氣の轉た澄むを覺える。今も両手に頭を支へて、つく〴〵響の行方を追へば、靜かな夜の大氣の中を、瀏瀉と漾つて遠くなり、幽かになつて、果は聞えなくなつた。彼は其時徐ろに起掛けて、卓上の水注を取り渇した咽喉を潤して、さて窓の方を視遣つた。

もう夜も明方と見えて、空氣拔きの孔がほの〴〵と明るい。何處やらで鳥の音が聞える。卓上の豆ランプを吹消して、再び枕に着いたが、不眠症で近頃は薩張り眠られぬが、此時ばかりは餘程疲れたと見えてとろ〳〵となる。其折の夢に誰やら後から纖弱な手を肩に掛ける者がある驚いて振反つて見ると、それは彼人で、莞爾して小聲で、凝然としていらつしやいよといふ。言はるゝ儘に凝然としてゐると、不思議や、入口の戸が自然とパッと左右へ開くと同時に、彼は忽ち元氣を恢復して、病の身に在るを覺えず、また三年以前の壯夫となつた、彼人と手を執交して、率然入口へ來てヒヨイと閾を跨ぐと、いつもの狹隘しい庭ではなくて、憲兵の衛所の影も見えず、其處らの光景が彷彿として何處か熱帶地方の花園のやうで、百花繚亂として咲亂れ、棕櫚あり、百合あり、まだ何やう名も知らぬ植物もある。二人は嬉々と大笑して其中を驅脱ける時、彼人が、もう是で厭な事のお終よ、これからは二人一緒に暮して、安全で、自由で、無限の幸福を味ふことが出來てよ……といふかと思ふとふと目が覺めた。

覺めての後憶ひ出せばいつまでも〳〵忘られぬは、彼人と別れた其夜の事である、遊説に出る前夜、二三の友が告別に來たその中に彼人も交つてゐたが、卓を圍んで茶を喫してゐる時、端なくも一場の議論を惹起して甲論乙駁いつ果つべくも見えない。問題は今始まつたものではなく、奥底は大抵知れてゐるから、彼は退屈して起上つて窓に凭つて庭の面を眺めると、夜色沈々として咲亂れたライラクの花香は紛々と鼻を撲つ其時彼人も席を離れて、窓際へ來て肩を比べて立ちながら、二言三言葉を交したが、話は其儘途切れて雙方無言になり、暫く立つて庭を眺めてゐる中、ふと彼方から身を摺寄せて「ねえ、貴郎」といつた其聲は顫ひを帶びてゐた、遊説にお出掛になつたら、何處で如何な事があるかも知れませんけど、假令如何な事が有つても、忘れて下さいますな。此世に貴郎の事を深く懐つてる者が一人有るといふ事を。ね、ようございますか」と彼を莞爾して然ういふ其人の手を凝と握り締めたぎり其晩は最う再び言葉を交さなかつたが、別れての後も絶えず眼前にちらつくは其人の面影、忘られぬは其夜の事……

もう全く朝になつた。廊下に足音がし出して、戸の開閉の音も聞える。朝の看廻りが始まつたものと見える。これで眠らずして見た夢も忽ち覺めて、黴の生えた壁や蜘蛛の巣だらけの天井が今更のやうに眼に着く。と、看廻りの看守長が部下を連れてぞろ〳〵と入つて來て、朝の麪包を卓に載せ、水注に水を注し、又ぞろ〳〵と隣房へ行く。隣房は狂人だ。いつも點檢の時病人が喚くのを聞くと、何でも自分は英國の貴族のやうに思つてゐるらしくて、即刻英國大使を召んで來い露國人でもない女王陛下の臣民を牧監するといふ法はない、何でも大使から抗議を申込ませると言つて騒ぐ、看守長は大抵は默つてゐるが餘り騒ぎが甚しくなると、極て落着いた調子で「何だ、貴様は最う一遍縛られたいのか」といふ。しかも、今朝は大層靜かで、看守長は最う點檢を濟したと見え、何の事やら好し好しといひつゝ、急足に監房を出て行く氣色がした。（未完）

日本美人揚大姐

夢想

夙に聞えし滿洲の馬賊、一騎當千の荒武者多き中に殊に一味徒黨の首領として其人ありと知られたる彼の揚二虎（國棟）此處に悲劇の一話こそあれ。

彼の最愛の妻たる日本の一美人、生は名も鴨川の西京の地、何の因縁ありしか去ぬる年揚二虎が京都に遊びし時計らずも此の花を手折りしなりき。海山の隔さほど遠からねど風土習俗の異なりし他郷の空、故山を跡に顧みて行く人の思や如何ならんと思ひ遣る人の心、さるを此の美人反つて自分より進みて異境の空指して行きしぞ健氣なる。

彼女は揚二虎と二人根據地を長白山腹に据へ、幾多の部下を統ぶる事とはなりぬ。彼女は武藝の心をさ〳〵怠らず日夜雄々しくもピストル射撃の練習をなせしとか、熱心の程深かりしものから數ケ月を出でずして其の技驚くべき熟達をなし天晴勇悍なる馬賊の妻として同じ仲間の羨むところ也き。部下の崇拜も愈増しに増し遂に揚大姐と崇めらるゝに至りし也。

かゝりし程に悲劇の第一頁は開かれし也、何ぞや揚二虎が南清萍鄕縣地方に起りし革命運動の運動者と認められ、奉天將軍の命により捕縛せられんとするの運命となりし事也。數列の馬隊は派遣せられ追手の勢愈々急となりしかば彼は住家を捨てゝ間道をとり安奉線の某驛まで落ちのびたりしに折も折、一列の汽車正に發せんとするを認め急ぎ之に飛び上りぬ然るに官兵の追捕愈々急にして寸刻も油斷すべきにあらねば遂に身を翻がへして車窓よりとび降り太孤山に逃れ此處に數日間潜伏せり。然るに此の地も永く停るべきの處ならねば再び隙をみて安東縣に逃れしばし潜伏せしかど是れ又官兵の嗅ぎつくる處となり進退谷まりしかば如何せんと思ひ煩ひしが幸に某志士の爲めに救の手を得て鴨緑江を越へ系統線によりて何れの地へか足跡を暗ませり、或はいふ南滿、或は云ふ日本の地と、吾人は詳と其の在り地を知るに由もなし。

揚二虎の消息は斯の如し、然らば彼の揚大姐は如何。聞說、揚二虎の逃れし後は官兵ひたすらに揚大姐を捕へんとし諸方に手をくばり遂に彼女を獲たり。其の苦心も又た一方ならざりしとか、腕に覺えのあるピストル名手の女丈夫、か弱き女の身を以て幾多の官兵を苦しめ力の有らん限り反抗せり。然れども多勢に無勢遂に彼女は捕はれて奉天府に引かれ將軍の嚴しき審問を受けし也。然りながら彼女は口を閉ぢて一言も發せず揚二虎の行衛は依然として知れず、此に於て彼女は遂に本溪湖附近なる陶務の一隅に幽閉せらるゝ事とはなりぬ。絶えて音信なき揚二虎の身や如何に、斷腸の鐵窓裡に怨恨の涙に暮るゝ人の身の上や如何ならん杳として我聞かず。

唯聞きし事は「希望の者には此の日本美人を十七圓にて賣渡す」との一言のみ

（完）

呼應寸東

長加部寅吉

治安警察法運動も頑硬、沒分曉なる貴族院の奴輩に妨げられて、甚だ殘念な事と陰ながら慨歎してをります。主として働かせられた貴姉の御失望の度の嘸高く劇しかつた事を思ふて同情を表してゐます平民新聞も遂に廢刊、殊に石川君は一年以上に渉る入獄、實に氣の毒とも何とも申しやうありませぬ、唯平民黨の志は須らく自重自愛して捲土重來の日を待つより他はあるまいと思ひます

○

山本信博

平民新聞は代金拂込遲延の爲め發送を止められ申候。其の前身の平民新聞、直言、光、等の時は然らざりしに、と云ふもの「曲！」僕にあり。代金拂込遲延に及ぶも全く支拂はぬ事は斷て是れなし、是は入らぬ事を申したり。

○

和歌山　高木芳一

野らには自然が想ひ緑のしとねを敷きつめ山には然面白く鳥なき、世間は何となしに活動の氣が滿ちてきましたね、私は「世界婦人」の愛讀者です、毎號もらした事はありませぬ。私の最も近出容しかつた事は第八號の第一面に載つて居た谷中村民の寫眞を見た時です、一寸一目見た時は長く別れて居た友人に遇つた様な感がしました、されど〳〵長くみつめて居た時には實に話につくされぬ悲しみの情に滿されました、春の花の候人は醉ひ人は舞ふの時哀れ谷中の同胞は饑に泣くより他は無い、思へば胸せまるのみ。

○

前田豊河一郎

荒放なる一流浪人の俤て貴下の家庭に食料を分たれたる往日のさま思ひみて小生は涙ぐまずんば非ず、當時余は悲観者なりき懷疑者なりき、小生は多言は致さじ、言外別に人生の涙あり、血あるべければなり。（以下略）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

小説 梅の花

谷尾水葉

(中) 訪ふ鶯

竹の朽ちた間籬は疎々として閑然たる雪解けの築山が見える、時を得貌な雀の群が今しも、はら〳〵と飛石の上に散らばつた、午時下りの暖かい日脚は斜に半ば開かれたる障子を射て、手水鉢の波紋が、おどろ〳〵に動きつゝ影して居る、

「おゝ暖かい」

と云ふと共に開かれたる障子が、ぴしやりと其音に驚いて庭の雀の群が羽音を立てゝ梨の木や、梅の片枝に飛び上つた、

「静雄様よく來てくださいましたね、來て何時も〳〵お迎ひに斗りあげて、來て戴いた處が何も珍らしい御馳走をするのでもなし、……濟みませんね」

「何です時さん、僕は其様な馳走が欲しいので來るのじやありませんよ心配して戴くと却つて困りますから、どうか何もせないでくださいな」

「私し何かとは思ふのですけど、貴郎が入らつしやるともう、何だか嬉しくつて仕様がありませんの！只もう何時迄も居て戴き度い様な氣がしましてね、……濟みませんね、併し……」

「何がです……何も濟むも濟まぬもないじやありませんか、何が濟まぬです」

と静雄は眞面目である、

「ほゝゝまあ眞面目だこと！……ですけどね、貴郎の様な事斗り云つたとていけませんもの、世間の方が皆貴郎の様な方ならいゝんですけど……家の妻が亡なつてからは夫でなくてさい、いろんな事を言ふのですもの……まして女一人の家へ度々來て頂いて……私し濟まないと思ふの！」

「それじや歸りましよう、御迷惑を掛けても濟まないですものね……僕は決して何とも感じません、又誰れも僕の性行を知つて居るものは、僕がどれ丈け繁く來た處が、正か變にも思ひますまいよ」

「そうでしようか、……夫れなら嬉しいんですけど……」

「夫れとも又、……何か言はれたにしろ、僕は何とも思はぬです、夫れは言ふ者が即ち惨忍極まる畜生なんだもの……自分等が女と云ふ者に對する意識から僕等を見て、何とかかとか勝手な事を誇ふのでしよう……夫れは即ち彼れ等が自己其者の卑しき品性を告白するのですよ……何も角も神様は御承知です、……僕等の潔白は神より外に知つたものはありません！」

「けど貴郎にも御氣の毒ですね……」

「いゝじやありませんか、僕は只貴女と云ふ一個の女性の潔白な節操を完全に保つ上に於て、即ち或る意識の保護とまでは行きますまいが、若しや惡い迫害と誘致に陷りなさらん様にと思ふ丈けで更に他意はありません、……貴女を慰めるのではなく、僕の理想を保ちたいと云ふに外ならぬ、貴女から感謝を受くべきものはありません！」

「夫れは幾度も承りまして私承知して居るの！けども……貴郎の仰有るその私の理性を保つと云ふのが……私何より難有く思ふのですわ、……私良夫が亡く成つて此方、もう〳〵東を見ても西を見ても、相談相手に成つて呉れる人はなし、いつそ……いつそと思ふた事が幾度でしよう、思ふてもぞつと致しますの！」

「だからいゝじやありませんか、お互に穢れた行爲さへなくば、何もそんなに苦しむの必要はないです、僕は貴女の理性があまりに僕の理性に合一して居るのに驚いたのです、……夫れでこそ眞の女性が成り立つのですよ……かまわんです、彼れ等虚僞の人間が愛する處は即ち惡で、彼れ等虚僞の人間の惡くむ處は善に外ならぬですもの」

お時はあまりに静雄の眞目面に驚くのであつた、然し今の自分には─傲ない自分に、あはれな寡婦に深い温かい同情の手を添えて慰藉の言葉を捧げて呉れるものは、天にも地にも静雄一人である、これを思へばお時は泣かずには居られぬのだ

「静雄さん……」

と斗りお時は男の膝に打ち伏した、静雄ははつと思ふて俄かに心臓に烈しき鼓動を覺へた……けれども此時は已に静雄は實に彼の女であるので、熱い涙がはら〳〵と女の首筋に傳する斗り、一言の言葉も發し得ぬ。而已ならず……静雄は彼れお時の身軀を自分の膝より取り除る勇氣も出なかつたのである。

されど静雄は決して穢れはせぬ、お時もそうだ。之れをしも汚穢と呼び、之れをしも罪と云ふの權利は何處にあるか、決して二人は汚穢はしない、潔白なものである。更に彼れ等が血には毒はない、汚れはない。元より普通ありふれた肉慾的發作のものとは認むる事が出來んのである。

噫！、けれども静雄とお時は未だ理性と理性との結晶は神聖なる戀である事を自覺せぬ、彼れ等は實に之れを悟らぬのである、理想が理想を求むるものは戀の意識の發作であつて、理想と理想の綜合は強き〳〵戀の成立である事を知らぬのだ。

(下) 春雨條々

静雄は書齋の机に倚つて暮れ行く空を眺めて居る、恰も降り積むで居る淡雪が、昨日からの暖かさに解けて滑らかな庭の芝生の背を表はしたるあたり、可憐なる鷄の雛が母鷄と共に餌を漁るべくさまよふて居る、春雨はしと〳〵と音して下陰の葉を叩くのである。

静雄は今や冥想から冥想に進みつゝあるのだ……かすかに聞ゆる隣り村の間城寺の晩鐘は、丁度静雄が辿りつゝある心の奥の或る影に響き渡るのである。

静雄は愕然として首を上げた、彼れは此時神を見たのである、生ける神の力に觸れたのである。お時の理性が自己の理性に合一するとのみ信じて、彼れが眞個の女性──即ち静雄が理想の女性を作り出ださんとした、全からしめようとした、静雄の希望は終に彼れが理想の女性をして、全からしめず、却つて之れを破さうとするのである事を自覺した。静雄が理性は即ち其理性を得たために相互の理性を理性のために犠牲に供するを厭はぬに至りたるを自覺したのである、恐るべきではないか、……静雄とお時との認むべき理性は、其理性のために自己の尊き理性の破滅をも辭さぬに至つたのである。此れを自覺した静雄は此處に始めて一種の疑惑を感せざるを得なかつた。で静雄は悶えたのである……お時と静雄とは、實に人並以上の戀の甚しきものである事を知つた爲めに。

静雄は此後お時の事が忘れぬのである、彼れが姿彼れが言葉は、何としても自分から去らぬのである。哀れ静雄の心は清うして穢れたのである、自分は戀はせぬ、そんな事はないと自信しても駄目である、論より證據戀しい、懷かしい、……忘られぬ……眼に見える耳に聞える幻は誰れであらう、あゝ誰れであらう？

(未完)

夕陽社詠艸

有香

戰場の　すごきすがたを　うれたみて
同志かたらふ　ジユナンを夢む
滑納の　罪を懲らすと　いかめしう　わ
れ鍋ひとつ　封じてゆきぬ
われ鍋の　封印にらみ　はらはらと　う
らみ涙が　おとろへし身の
こゝろなく　貢納おこたる　我が罪っ
たゝひもとうて　たゝさむうして
窓の上の　母の寫眞の　前にして　歌お
もふ夜を　雁なきわたる
杉のあなた　牧場の牛の　群をながめ
のどかの春と　人はゝえむ
はろぼろと　鳥啼く森の　夕闇に　別れ
の歌の　ふしのみだれて
起きもやらず　想をたどる　朝の窓に
雉子啼くなり　空寂うして

雛雉の聲

上毛北甘　蔚柳子

流るゝ光陰ゆる血の
人生の春は過ぎ易く
名殘の涙に顧みては
紅顔消ゆる夢の跡

習慣久しき天の手に
運命の綱を繋れては
自由と呼ぶも獨立の
籠の存在の思ひかな

僕の濁流に漂へば
何時な抗ふの術に違はむ
いざ革命の流れわけて
理想の翼擴はすや

十六億の僕の人の
數の中に妻にして
五千餘萬の國人の
數の中には儚なよ

紅粉化の襲ひも
誰か玩弄の醜ぞや
智慧も位も僕の粟も
誰か與への權力ぞ

天賦の命に甚なしと
性に尊卑の別ありや
女權の叫び甲斐もなく
斯くてぞ永久に過すべき

夢のはかなき同情の
理想は實と現はれて
何時か見なむ本斯の
光りまばゆき朝ぼらけ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

灯影幻影

秀湖生

君、聽き給へ、あれが先刻二人して通つて來た水車の音だよ。寂しい宵ぢやあないか、最早そんな陰鬱な話は努めて止めにして、本郷時代の話でもしよう。……チョイト失敬……其炭籠をとつて呉れ給へ。

去年の四月の末であつたらうと思ふ。丁度『自由思索會』の例會が宵の六時頃から、角筈村のS君の宅で開かれた日の事であつた。其晩は『進化論』が研究の主題で、有名な『國體論』の著者のK君——君は未だ知らないね、僕等の仲間ちやあ稀に見る眉目清秀の好男子だよ——其K君が大に生活のインナー、パワーを主張すると、面白いのは例の教會攻撃の急先鋒のY君よ、あれが唯物論の立場からピユーア、メカニズムを執つて動かない、そこで恐ろしい論戰がK君と、Y君との間に開かれた。何しろ、彼の二人の喧嘩だから面白いたら無いのさ。

季節の變り目に、此平原によく起る一種の強風が、宵から降つて居た油のような暮春の雨を煽つて、散會する頃には、中々激しい勢で雨戸に吹き付けて居た。S君夫婦は頻りに泊つて行けといふて勸めて呉れたけれど、其時は未だ二人が結婚して間もない頃であつたし、宅も手狹なので、僕は遂に辭退して淋しい、眞暗な場末の夜道を、暴風雨を侵して新宿へ急いだ。

危險を警める赤いランターンが、雨のしぶきに映つて、物凄い闇を照して居る、其光を見た時に僕はどんなに嬉しかつたらう。けれども僕が停車場に着いた時、汽車は一足先きに出てしまうた後であつた。

其時新宿の停車場は、今のとは違つて、一體に石炭の煙に燻つたような、穢い、狹くるしいものであつた。恁んな嵐の夜更けではあるし、殊に今、品川行の終列車が出て仕舞つた後なので、待合に乘客は僕一人、それも終列車に乘りをくれた、憐れな客ではないか。

時間表を見ると、上野行の終列車がまだ一つ殘つて居る。僕は仕方がないので此上野行に乘つて巣鴨で下りて、河合の伯母の家に泊めて貰ふと決心した。

寂しい十五分間であつたよ、朦朧とした洋燈の光の下にツクネンとして、硝子窓に碎ける雨の音を聞きながら、昔の——といふた處で學校に居た時分の事を想ひ出して、それから、それへと追懷の糸をたぐつて居た。今でこそ角筈村には自分の親しい友も澤山住んで居る、けれども僕が初めて角筈村に來たのはもう久しい以前の事で、大學の雄辯會といふものゝ幹事をして居た時であつた。忘れもしない身を斬るような西風が、はげしく四谷街道の砂塵を吹き捲くる冬の日の午後であつた。內村鑑三氏を訪ねて面會を求めたけれども病氣といふので謝絶されてスゴ〳〵停車場に引き返して來て、恐ろしい沈欝な眼で石炭の毒煙にいじけた構內の黑い檜の葉がくれに映る夕照の空をヂツと眺めて居た。汽罐車の附換をする、亡者の樣な運轉手や、信號手の苦しい勞働を觀ながら巣鴨の汽車を待つて居た時のけしきが、アリ〳〵と眼に浮んで來る、それはもう寂しい十五分間であつたよ。

暗の暴風雨を衝いて來た終列車はどことなく騎馬の勇士に追ひまくられた、敗殘の魔物の樣に音もなくプラツトホームに着いた。輕快な洋服に外套の襟を立てゝ、雫のする洋傘を手に持つて、驛夫があけて呉れたまゝに三等室のとあるシートに入つた。乘客は一人もない。只僕のシートに向ひあつて一人妙齡の、目さむるばかりの美人が居る。紅鶴色や、淡紫や、間色好みの、それはもう挑發的な衣裝に、格好な廂髮、脂粉を凝らした態は、此暴風雨に情なく葬られる暮春の花の精が拔け出して茲に現はれたのではあるまいかと訝まれた。陰鬱な悽愴な、荒涼な闇を衝いて忽ち眼前にこの妖艶な、濃厚な、暖室に咲いた花のような美人を見せられた僕は、暫時は忙然として夢みるような心地であつたけれども、やがてそれは僕が曾て本郷に居た時分、朝夕見なれて居た、評判の處女であるといふ事を想ひ出した時に、僕は今更ながら自分の記憶の鈍いのを叱つて見たのであつた。

「オ、彼女であつたか、彼女は未だ依然として十八歲の處女ではないか」僕は指折り數えて見て今更に驚いた。自分が本郷に居た時からもう六年になる、さすれば彼女はもう今茲廿四歲の筈である。『人並すぐれて美しい容貌を持ちながら、何として彼女は恁んなに久しい處女であるだらう。』

僕は白狀する、僕が始めて本郷の場末の伯母の宅に同居するやうになつた時、未だうら若い其頃の僕は、同じ生垣續きに住んで居る此あでやかな處女を見落すことは出來なかつた。僕は彼女の姓を知つた。僕の心はそゞろとなつた。僕は更に苦心して彼女の名も知つた。そして更に彼女の年齡も聞いた。僕は私かに自ら得意たらざるを得なかつたのである。

（未完）

。　。　。　。　。　。

子供心

嘯月

幼さい女の子を連れて花賣のお婆さんが來た、白家の美ちやんが直ぐ樣とび出して片手に五厘握つたまゝ籠の中の花を擇りかける、六ケ敷い顏して凝視て居た女の子は美ちやんが花を擇るのを「厭だ」と云つて納めやうとする、お婆さんは「お飯が食へないよ」と驚かす、女の子は籠に手をかけたまゝ泣き出した、美ちやんも泣き出した。

各國語聖書、基督教書類
其他一切新刊書類確實販賣
東京神田區猿樂町二十五番地
振替貯金口座六三三三〇番
中庸堂書店

○英文英語朗讀法　エリオツト先生著　定價貳拾錢　郵税貳錢
○英文單純生活　チヤーレス、ワグナル著　定價三十錢　郵税四錢
○英文基督の事實　カーネギ、シムソン氏著　定價拾五錢　郵税四錢
○英文廿世紀新約全書　定價壹圓卅五錢　郵税拾錢
○兒童研究　ハリソン氏原著　松本春枝君譯　上製七拾錢　並製五拾錢　郵税八錢
○埃及聖地旅行談　青山學院教授山田寅之助先生著　定價五拾錢　郵税八錢
○平和の福音　佐藤廣吉君著　定價四拾錢　郵税六錢
○哲學の諸問題　神學士　田中達君譯　定價參拾錢　郵税四錢
○神の觀念　神學士　田中達君譯　定價參拾錢　郵税四錢
○人の運命　神學士　田中達君譯　定價貳拾錢　郵税四錢
○日々の力　根本正君譯　定價五拾錢　布紙參拾五錢　郵税六錢
○女子立身傳　根本正君譯　定價四十錢　郵税八錢
○はなしの園　古谷新太郎君編　定價三十五錢　郵税六錢
○青春の危機　渡邊房吉君譯　定價參拾五錢　郵税六錢
○生ける基督信徒　クロン、モツト先生演說　鑑浦文彌君譯　近刊
目錄御入用之御方は貳錢切手を添御申越あれ
東京市京橋區銀座四丁目壹番地　電話新二五二六
內外書肆　教文館

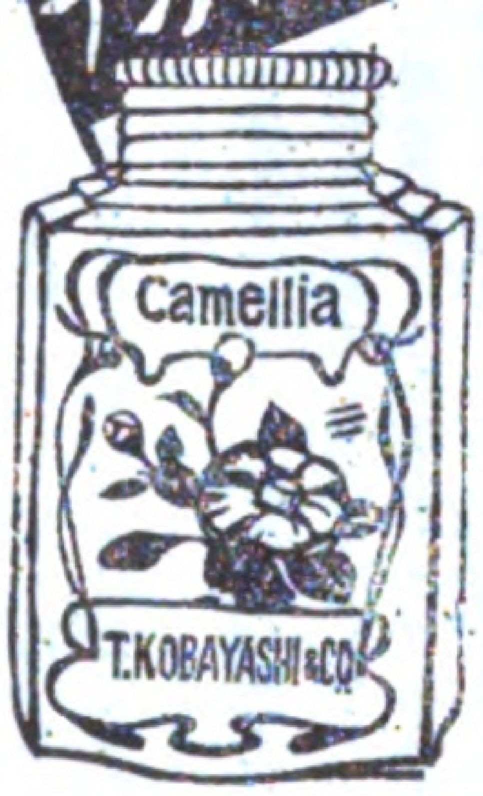
●齒科治療　自午前八時至午後六時●
神田區須田町廿六番地
齒科醫　吉瀨才一郎
勞働者諸君に限り藥價診察料共に御隨意
晝間執業者の便利上夜間十時迄治療仕候

ローヤル水ハ最モ高等ナル最モ進步セル最モ名譽アル化粧水ナリ
定價拾錢　拾五錢　廿五錢
ローヤル白粉ハ最モ改良セル最モ優等ナル無害ナル白粉ナリ
定價拾錢　拾五錢　五拾錢
發賣元　つやぶきん　佐々木商店

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

時代の要求により生れたるカメリヤは色白くきめを細かに艶を増し肌を滑かならしむる最新最良の洗粉なり年若き方々のみならず老年の御肌には殊に効驗著し

定價　大瓶廿五錢　瓶入十二錢　袋入五錢　小袋三錢



本舗　ライオン齒磨發賣元　東京神田柳原川岸　小林富次郎

女鑑

第十七年第五號　價一冊廿錢

五月號目次

▲家政に就て　細川男爵
▲師弟の關係　小川文學士
▲女子の操行　坂田法學士
▲衣食に就て　高木男爵
▲育兒に就て　加藤博士
▲病人と菓果　久保醫學士
▲食物と衛生　太田醫學士
▲料理と製菓　富田豊春
▲人種と教育　坪井博士
▲婦人の服裝　下田歌子
▲女子の美術　新渡戸博士
▲潮來の曲　渡邊雨山
▲若葉かげ　鍋島侯爵
▲多摩川　佐々木信綱
▲心の友　阿部優子
▲寫眞術實驗　井伊直方
▲桃さくら　千家尊福
▲初夏の歌　本居博士
▲東京博覽會（記者）◎口繪藤花（石版彩色）●合祀看護婦●東京博覽會女風俗十二景●南部伯と同夫人●夜の博覽會●女學生の遊戲等依例
▲婦人博覽

東京築地二丁目　京橋區　電話新橋八八　二六九三

國光社

新築落成移轉

小兒科　內科　外科　病　診療

府下淀橋町角筈（水道前）

淀橋醫院

竹下繁太郎

於內外大博覽會受領 名譽金銀一等諸賞牌

體操及び運動器械

樂器及び教育品

日本東京市本郷區本郷五丁目

美満津商店

（特電下谷八四五）

五月一日より 夏衣新柄賣出仕候

寄せ切見切反物も夥く取揃へ日々差換へ陳列致居候

御便利の為め博覽會入場券景品相添へ差上申候

（松）

神田今川橋

松屋呉服店

日本一婦人雜誌の內容御覽

婦人世界

五月一日發行　二卷第六號　一冊拾五錢　郵稅壹錢　六冊五拾五錢郵稅共　一年九錢

◎口繪　◎彩色畫三枚◎各女學校の優等卒業生總代◎名家若夫人◎名家令孃鑑◎新婚寫眞

◎藤を詠じたる名歌評釋　與謝野晶子氏
◎私の感心せる女學生
◎婦人の眼につく博覽會
◎小說（苦學生）西村醉夢

◎弦齋夫人　五月の珍料理

◎少女欄　△わらび△ぜんまい△蕗　弦齋氏意匠並に執筆

◎閑院宮女王殿下御在校中の御勉强（跡見李子）

◎我娘を嫁に遣りし時の實驗談（阿部夫人）（棚橋絢子）

◎子供に親の云附を守らす法

◎活動的婦人鳩山女史
◎米國中流社會の住家具
◎小兒消化不良の病（加藤博士）

◎結婚前の理想と後の實際
◎どもり全治實驗
◎東京女學生間の新流行

娘時代の生活法　村井弦齋

婦人世界臨時增刊

化粧かゞみ

◎大好評（四月十日發行）定價一冊金拾五錢郵稅壹錢五厘

村井弦齋閲　村井案立校

和洋新式化粧法

東京京橋南紺屋町　實業之日本社　振替貯金口座參六番　各地賣捌書店

◎定價　△一部四錢五厘、十部四十二錢、二十部八十錢
東京府豐多摩郡淀橋町角筈七六二番地
東京府豐多摩郡淀橋町角筈七六二番地
東京府豐多摩郡淀橋町角筈七三八番地
東京市京橋區築地二丁目廿一番地

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY